



《教育長メッセージ 第59号》

『比べること』

私たちは、「比べること」でモチベーションを保ったり、安心したりすることがよくあります。

例えば、子どもの頃、テストを返されて、友だちと点数を比べて「負けないようにがんばろう。」と思ったり、低い点数でも自分より低い友だちがいると安心したりしたことはないでしょうか。

子どもたちは、自分をよりよくしようとします。自分はよりよくありたいと思います。

教育指導の手法では、そんな子どもたちの本来持つ姿勢を利用する場合があります。

ひとりひとりを「比べること」による競争という手法です。

例えば、教員は、テクニックとして、学級で子どもたちの姿勢をただす時、「〇〇さん、姿勢がよいですね。」と声をかけます。すると、他の子どもたちもそれを真似して姿勢をよくしようとするのです。

よくない子どもに注意するのではなく、よい子どもを褒めるという方法です。

これはまだ認められるのですが、時に、教員は、「〇〇さんのようになってしまうよ。」など、よくない子どもを引き合いに出して、それと比べて注意をすることがあります。

これはいただけません。学級の中で、比べることにより、どうしてもないレッテル貼りを教員は、無意識に行っている場合があります。

前者にしても、私は、その手法に疑問があり、ほとんど使うことはありませんでした。

子どもどうしを「比べること」で指導すべきではないのです。

子どもたちは、それぞれその子なりの特性があります。それぞれひとりひとり違います。だからこそ、大切な世界でたったひとつの命なのです。

そう考えるとどうでしょう。

子どもどうしを「比べること」には、どんな意味があるのでしょうか。

私は、子どもひとりひとりがお互いを知り、自分を知るために、「比べること」が必要であると考えています。

成長過程のその時点での、他の人のよさや自分のよさを知り、今後、自分をよりよくするためには、「比べること」が必要なのです。

ただし、教育の場でおやみに子どもどうしを比べて競争をあおったり、

成長過程の子どもを比べて、その子どもの善し悪しを決めつけたりすることは、大きな間違いではないかと思うのです。

子どもたちひとりひとりのよりよい成長のために「比べること」を慎重に行ってほしいのです。

次回は、「苺」をテーマに、私の思いを述べてみたいと思います。